

バンディングかわら版（第7号）

鳥類標識調査（バンディング）で得られた成果をお知らせするニュースレター

鳥類標識調査（バンディング）とは？

番号入りの足環（標識）をつけた野鳥を放鳥し、のちに同じ鳥が再発見（回収）されることで、各個体の移動を調べ、その生態を明らかにする調査です。

世界各国で行われており、最も歴史の長い自然環境調査の一つです。日本では1924年に開始されました。現在は環境省が山階鳥類研究所に委託し、多数のボランティア鳥類標識調査員（バンダー）の協力により実施されています。



野鳥につける足環。足環をつけることを「標識」する、その個体が再発見されることを「回収」と言います。

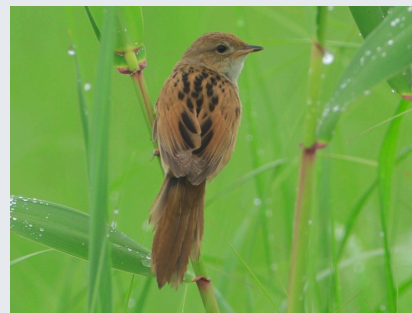
注）この調査は、野鳥を捕獲するための法的な許可（鳥獣捕獲許可）を受け、実施されています。

標識調査からどんなことがわかるの？

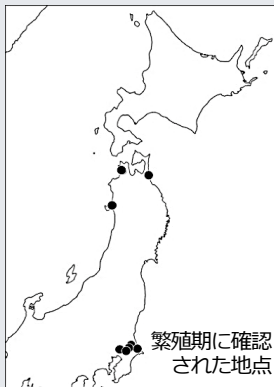
絶滅危惧種オオセツカの越冬地の可能性が高い場所を見える化

オオセツカは環境省レッドリストで絶滅危惧IB類（EN）に選定されています。個体数が少ないだけでなく、生息域も限定的で、繁殖地は本州と九州の一部で見つかっているだけです。情報が少なくどこが越冬地かはよくわかっていません。絶滅危惧種を保全するには、繁殖地と越冬地を解明することや、繁殖個体群間の交流を解明することが重要です。

そこで、長期に広域で実施されてきた標識調査データを活用しオオセツカの確認地点を調べました。



オオセツカ（写真提供：宮 彰男 氏）



約60年間(1961-2020)のデータによると繁殖期（6-7月：689例）は4県10地点、越冬期（1-2月：225例）は8県20地点で確認がありました。

繁殖期・越冬期とも、これまで知られている地点と一致しました。観察ではより南でも越冬が確認されていますが、主要な繁殖地である北日本や関東が、主な越冬地でもあったことがわかりました。

長期データに基づくオオセツカの広域での状況が把握できました。

より詳しく知りたい方は令和4年度調査報告書 p.23-35の本調査結果をご覧ください。
(<https://www.biodic.go.jp/banding/report.html>)

鳥類標識調査にご協力ください！バンダーになりたい方、足環のついた鳥を発見した方、いずれも右記までご連絡ください。

宛先：〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
山階鳥類研究所 鳥類標識センター
電話 04-7182-1107 FAX 04-7182-4342
E-mail: BMRC@yamashina.or.jp

どんな鳥に何羽くらい足環をつけているの？

2021年に足環をつけて放鳥された鳥の総数は287種133,923羽（前年より10,054羽減）でした。上位3種は、アオジ（26,608羽）、オオジュリン（19,188羽）、メジロ（7,583羽）です。1961年から2021年までの累計放鳥数は、503種、約639万羽（6,386,429羽）となりました。



標識調査からどんなことがわかるの？

鳥類標識調査が提供する、鳥以外の調査の機会

植物の種子やダニなどが鳥の体に付着して運ばれることがあります。鳥類標識調査は、鳥そのものだけでなく、鳥によって運ばれるこれらの生物を調査する貴重な機会にもなります。



標識調査で放鳥されたオオジシギ（個体の足環番号6A-46012）と、その胸の羽毛に付着していた*Glyptophysa*属の巻貝（写真提供：小田谷嘉弥氏・齊藤匠氏）

鳥に運ばれる生物と鳥類標識調査 —オオジシギに付着した巻貝の発見—

オオジシギはオーストラリア東部で越冬し、北日本とロシア極東地域で繁殖するために日本を經由していく渡り鳥です。2022年4月に関東地方で行われた標識調査で、捕獲されたオオジシギの胸の羽毛から巻貝が見つかりました。

このオオジシギは渡来直後の可能性がありました。そうであればこの貝は越冬地である海外から日本へ運ばれてきたこととなります。そこで、貝のDNAと形態を調べた結果、日本では記録がない貝の1種であることが分かりました。（文責：小田谷嘉弥氏）

オオジシギの越冬分布とこの貝の分布を合わせて考えると、**「オセアニアのどこかで付着した貝が、少なくとも4,000km以上を飛行」**して日本に到着したと考えられます。

今回の発見は稀なことですが、長期間に渡りくり返し行う標識調査だからこそ、稀な現象を見つけることを可能にしています。また、鳥以外の研究分野が、野鳥を扱う研究分野と連携するきっかけも標識調査は提供しているのです。

この発見は、移動能力の低い生物の長距離移動を可能にする要因として鳥類が重要であることを示す決定的な証拠となり、国際的な論文雑誌に掲載されました。この研究についてより詳しく知りたい方は、以下の論文をご覧ください。

Saito T, Tatani M, Odaya Y & Chiba S (2023) Direct evidence for intercontinental dispersal of a snail via a bird. *Ecography*: e06771.